

L. L. Janes 『生産初歩』 について

山田, 龍雄
九州大学農学部

<https://doi.org/10.15017/23105>

出版情報：九州大学農学部学藝雑誌. 26 (1/4), pp. 445-454, 1972-03. 九州大学農学部
バージョン：
権利関係：



L. L. Janes『生産初歩』について

山 田 龍 雄

On Seisan Shoho (Introduction to Agricultural Production)
by Leroy Lanssing Janes

Tatsuo Yamada

まえがき

明治維新直後、諸藩は争つて旧体制の改革を行なつたが、そのなかでも肥後熊本藩は横井小楠の遺風をうけて最もラジカルな民主的改革を志向した。それは、例えば旧藩主の“村々小前共江”あてた、百姓の長い間の困苦は“全く年貢夫役の辛き故也と、われ深く恥おそる”という直筆の自己批判書に始まり、熊本城取り崩し計画にまで発展する。この計画は政府の許可を得たまま実施が遷延しているうちに西南の役の戦火にあうのである。

しかし、このような動きも明治6年には早くも明治政府の反動的支配にくみ入れられる運命にあるが、ここで紹介する L. L. Janes『生産初歩』は、このめざましい近代化運動の下で藩校時習館の廃止に対応して設けられた熊本洋学校を母体として生まれたものである。

もちろん、当時、洋学校またはこれに類似した西洋文物吸収のための教育施設は各地に叢生しつつあり、外国人教師の数も決して少くはない。その中で多数の俊才を育て、とくに後年京都同志社の建学に貢献する幾多の先覚的クリスチャンを輩出した熊本洋学校存在は、全国多数の類似施設の中でまったく異彩を放ち、その比を W. Clark の札幌農学校にみる位であろう。これはその教師 L. L. Janes の人格、資質によることはもちろんながら、肥後熊本の風土と当時の民主的傾向と決して無縁ではないであろう。^{*} 札幌農学校における Clark の名声は余りにも顕著であるが、一方、Janes の同志社建学を通じての近代日本キリスト教

史における地位もこれに劣らず有名である。しかし Clark が近代日本農学史において必ず言及されているのに対して、横井小楠の実学的風土に迎えられ、少年横井時敬の師であつた L. L. Janes の農学上の事蹟についてはほとんど知られていない。

それというのも、従来の Janes 研究がキリスト者の側からのみなされていたことと、^{**} 農業に対する彼の考え方をうかがうべき文献が欠けていたからであろう。ところが筆者は先年、熊本県たばこ史を研究中、たまたま本田彰男博士より氏の所蔵にかかる Janes の『生産初歩』と題する講義訳本を教示された。関心の余りその後若干の考証をとげることができたので、ここに同博士の御快諾を得て紹介することにした。本稿は紙数の都合上、この書の書誌学的研究と内容紹介にとどめ、これをめぐる農学史ないし農業史的考察は改めて他日を期したい。

1. 明治初年における西欧的影響を うけた農書の概観

ここで紹介する『生産初歩』は本論巻頭に米国カピテン・ゼンス氏著、白川県洋学生徒山崎為徳、松村元児、市原武正集訳とあり、出版年次は明記してないが後述のように明治7年前後と推定される。発行元は“官許 東京芝大神宮前 岡田屋嘉七”とあるのがそれであろう。

本論は1頁200字で58頁、序文3頁を加えて61頁の小冊子にすぎない。けれどもこの書の重要性は、エル、エル、ゼンス識と記された自序の冒頭に「余此書ヲ著スハ肥後人民耕作ノ進歩ニ良全ノ教導ヲ示シ、傍

^{*} 当時の熊本県の風土をこのように一面的に民主的に考えることはできない。むしろ一般的には神風連で知られるように逆であった。だが、それ故にこの傾向を重視する必要があると思われる。

^{**} 同志社大学人文科学研究所『熊本バンド研究』はその集大成というべきで、本稿も同書に多くを負うている。

「ラ国人許多ノ疑問ニ答フルニアリ」と述べているところにある。すなわち、この書は農業技術一般を講ずるのでもなければ、欧米農業の実態を説くでもない。日本の、とくに肥後人民のためにその農業がいかにあるべきかを語っているのである。ここに重要な意味がある。

そこで念のために明治初年における日本農業に対して西欧的知識ないし学理の導入状況をふりかえってみよう。それには新農業、新作物、新技術の導入のように直接に実際面にかかわる場合もあるが、ここでは文献的に農書のみについてとりあげることにする。そのばあい、このような農書には3つの型がある。すなわち、第1は欧米農書の翻訳書。第2は欧米の農学を学んだ日本人の日本農業に対する著述。第3は日本に滞在する欧米人の日本農業に対する科学的著述。『生産初歩』が第3の型に入ることはいうまでもあるまい。そこで以下これらの型に属する代表的な農書の傾向を検討することにより、『生産初歩』が当時の日本としていかに珍重なものであるかが理解できるであろう。

第1 欧米農書の翻訳書

農商務省『農事参考書解題』（1926）、斉藤之男『日本農学史第一巻』（1968）、高市慶雄『明治文献目録』（1931）などによって主なものを掲記すると次のとおりである。

『西洋開拓新説』英ラウドン著、緒方儀一訳 明治3年。

『官版 泰西農学』英フレッチェル著、緒方儀一訳 明治3、4年。

『西洋農家訓』仏バロー著、神田豊訳、明治6年。

『斯氏農書』英ヘンリー・ステファン著、岡田好樹・明石春作訳 明治8年。

『斯氏農業内容』著者同上、後藤達三訳、明治8年。

『農理學初歩』米ラットン著、久原躬造訳、明治10年。

『英国農業篇』英ウィルソン著、岡田好樹訳、明治11年。

以上のうち『農理學初歩』以外については斉藤氏の『日本農学史第一巻』（51～64頁）に簡単ながら解説されている。ここでは九大農学部にも原著が所蔵され、訳書は和装64冊におよぶ『斯氏農書』をこの型の代表として、筆者なりにその特徴を述べてみよう。これは英国の農場において春夏秋冬の経過につれて生起する農作業を中心として、それに必要な農学理論を教えている。たとえば、春の播種に際しては耕耘の意味、プラウの構造・使用法を述べ、作物論、品種論、

発芽の生理等々を説くという方法である。したがって小麦でも家畜でもまとまって記述されているのではなく、季節に応じて分載されている。いわば農事暦的な体裁であるが、単に農作業の順序や心得だけでなく、それらに近代科学的説明を加えているのが当時の日本の水準にてらして大きな特色である。

この外、経営の問題にもふれているが、ここでは省略する。上記の技術的側面だけについてみても、斉藤氏がその解説のなかで“泰西農学者は読者の立場を無視してはいない”と述べているのは筆者も同感である。つまり個々の技術を農業経営からきり離したり、画一的や天下りの指導ではないという意味である。しかし日本との条件の相違についてはこれらの翻訳書が何も語らないのはもちろんである。

第2 日本人による西欧農学の輸入

欧米に学んだ日本人がその習得した近代科学に拠って、日本農業に対する新知見を著述した農書としては、明治初年の段階ではまず津田仙『農業三事』（明治7年）をあげるべきであろう。彼は下総佐倉の旧藩士であるが、明治6年Wienの万国博覧会参加の一員として渡欧の際に学んだ結果を以って、気候理設法（土壌改良法）、樹枝傾曲法（整枝法）、不花媒助法（不花人工授精法）と称する新技術を発明した。これが『農業三事』の核心をなすものである。もつとも結果的にこれらの3事が成功したとはいえないが、当時としては彼なりの科学理論に裏うちされていたので大きな反響を呼んだのであつた。なお、彼は学農社農学校を設立し（明治8年）、『農業雑誌』を発刊し（明治9年）、多くの啓蒙活動を行なつた。

それらの事蹟については余りに有名であり、ここで改めて説明を加える必要はないし、またその余裕もない。しかし彼以後、自ら学んだ近代科学を以って日本農業に立ち向う日本人は、札幌農学校や駒場農学校の卒業生を待たねばならかつた。それも評論や研究報告などを除けば酒匂常明『改良日本米作法』（明治20年）を最初とするであろう。

このように明治初年において西欧的学殖を以って日本農業をみた人はきわめて少ないが、ここに逸することのできないのは河野剛（禎造）である。彼が蘭学からのアプローチであるのと、出版は明治3年であるが著述は慶応4年にすでになされているので、津田仙よりもむしろ早いことになる。彼についても多くの紹介がなされているが、その評価は必ずしも一致しないのであえて若干の言及を試みることにする。

河野剛は筑前波多江の人医家の出であるが藩命によ

り長崎に遊学すること14年、その間、P. F. Sieboldにも学んだ。明治維新直前に中国地方に遊び『農家備要前篇』5巻を著わした。これが明治3年備申黒金舎より出版された。維新後、匠を廃し京都府権参事となり、かたわら『農家備要後篇』の執筆に努めていたが、同4年稿未だ全く成らざるうちに京都にて没した。年56。(福岡県史資料第6輯・1949)

このように彼の主著は農学にかかわり、別に『農業花暦』(明治3年)と題するダイジェスト版(折本)もあるが、彼が本来長崎で学んだのは医学、植物学、化学、物理学などであつて『舎密便覧』(安政4年)という訳書もあるという。蘭学系であるが、この近代科学的教養を忘れてはならないと思う。

そのことは農学に対する態度として先人では実践的な大蔵永常よりは、佐藤信淵や古くは中国の『農政全書』に倣つて『農業全書』を著わした宮崎安貞に近いものを思わせる。

『農家備要前篇』の構成もかなり『農業全書』に対応するものがある。『備要』は5巻に分れ、第1巻は“空気の総括”であつて気候論である。これが安貞との相違であつて同じく巻頭に気候を説くとしても自然科学者としての教養をうかがうことができる。もつともそれだけに農業との関係を直接に論じているところはすくない。第2巻“五穀”、第3巻“糞之部”第4巻“土地の成分”など、いずれも植物学、化学の体系的知識に基づいて述べられている。全体の分量は安貞の『農業全書』に比すべくもなく、また農業技術の実態については大蔵永常に多くを負っていることは明らかであるが、永常や信淵の蘭学的知識が断片的であるのに対し、これには体系的な科学習得者としての面目がうかがわれる。『後篇』は果樹蚕桑にまでおよぶ計画であつたというから、分量はともかく全体の構想はやはり『農業全書』に近いと考えられる。なお第5巻は“救荒”であつて農書に救荒をあわせ論じなければならないのはアジア農書の宿命であろうか。

このように第2型として津田仙より早い時期に河野剛をおいてもよいと考えられる。

第3 外国人の日本農業論

明治初年に日本農業に対して近代科学の照明をあてた外国人としては、何といつても、C. Wagnerをあげるべきであろう。彼は長崎で明治維新を迎えた独乙科学者である。したがつて農業よりも工業全般について当時の官民に重要なアドバイスをしたし、それらの

報告書も発表されている。^{*} また明治4年ごろから各方面に招かれた欧米人の中では日本農業に関し何らかの報告や著述をなした者もいるのであろう。けれども管見のかぎりでは印刷刊行されたものは知らない。

筆者のわずかに知るところでは京都府御雇米人 J. A. Weed の“西洋農学日講随録”(明治8年)、同“農業会記”(明治9年)を知るのみである。この外に札幌の W. Clark には“日本国ニ要スル農業、修整”という論文がある(開拓使『札幌農学第1年報』明治11年)。

J. A. Weed は明治政府が主として士族授産を目的として設立した農牧場の教師であり“単なる外国語の教師ではなく農牧学そのものの教師であつた”(桑原正信・京都府農会の成立『日本農業発達史』第3巻395頁1964)からその講義も正に農牧学そのものに限られていた。

このように明治初年来日した欧米農学者ないし農業指導者の残した文献ははなはだ少い。しかも特殊分野にかぎられている。日本農業の環境条件をふまえた本格的文献は周知のように Max Fesca, 『日本地産論』等(明治24~27年)によつて大成されることになるが、それが邦訳公刊されたのは明治中期である。

以上のように明治初年における西欧的影響と日本農業の接触の仕方は、少くとも文献上では3型式ともきわめて限られており、扱い方も一面的であつた。日本の風土に即して全体的にとらえようとしたものは、日本人の資料にもほとんどみられなかつた。このように検討するとき、後に明らかにする L. L. Janes『生産初步』がいかにか独自の見解に溢れ、“肥後国人のために”という問題意識に満ちていたかが分るのであろう。

2. L. L. Janes と熊本洋学校^{**}

Janes を語るためには熊本洋学校から始めねばならない。熊本洋学校は幕末に設立された洋学所が明治3年に再興された。ただし当時は名のための洋学所であつて講義はもっぱら漢学であつたという。そこでその抜本的改革の下に外人教師を迎えることになり、長崎の医者 Verbeck のあつせんによつて、米国退役陸軍大尉 L. L. Janes が迎えられることになつた。彼の熊本到着は明治4年8月14日であり、これを以つて洋学所は熊本洋学校と改称された。学校の経営は国・県費で賄われる筈であつたが、政府の方針の変更によつ

^{*} これについては齊藤・日本農業史に詳しい。

^{**} 熊本洋学校については杉井六郎氏の研究が最も詳しい(前掲『熊本バント研究』所収)。

てしばしば財政難に陥った。しかしその度に主として旧下級藩士や豪農より成る実学党の人々の支持によってとも角も5年間は継続できた。

生徒は旧藩士や豪農の子弟が多く、いずれも14、5才を中心としていた。徳富猪一郎は11才で入学したが年少のため退学させられ、8年に13才で再入学を許された。場合により他県人も入学させている。授業科目は、英語、数学（代数幾何）、物理、化学、星学、地質学、人体学にもおよんでいる。修業年限4カ年。Janes がほとんど1人でもつばら英語で授業をしていた。当時の教科書、参考書が現在、熊本女子大学に所蔵されているが、それによると教育水準は旧制中学程度かと思われる。なお農業関係では百科事典を除く外は、専門の教科書や参考書は見出すことができなかった。

ところで、Janes は“1838年米国 オハイオ州ニューフィラデルフィア市に生れた。陸軍士官学校卒業後、南北戦争に参加、功によって大尉となる”。戦後、Maryland州で農場を営んでいるときに交渉をうけて来日したのである。このように彼は札幌農学校に来たClarkが、Masachusetts州農科大学学長という正統的な農業教育者であつたのとはまったく異なり、元来は軍人であり、農業上の学識は自らの農場経営のための学習と体験以外にはなかつたと考えられる。

そのJanesの熊本洋学校における教育実践の一斑を卒業生の追憶談から拾つてみよう。

“Janes氏熊本来りて以来、日に教育に熱中し5年の間1歩も遊覧のために熊本を距りしことはなく、氏が教場に在るや厳然として威容犯すべからず、その生徒の怠慢を誦むるや、千軍万馬の間に士卒を叱咤するの概ありしと。されどまた親愛濃情、生徒を愛する子の如し……”（『九州文学』* 31号 明治26年 復刻版121頁）。

“しかして氏は甚だ農事を喜べり。竹崎翁もまた頗る農事に心あり。故に談農事におよば二氏時を忘れて語り、労を忘れて農具を試みて。かつJanes氏に請ふて諸種の器械を注文する者あるときは氏は喜んでこれを周旋し、多くは氏自らの金を投じてこれを取り寄せ、果して注文せし人の望に協ふに非ざればその代金を払わしめざりしと”（同誌 134頁。上記に竹崎翁とあるは当時の熊本県庁主流派をなしていた実学党のリーダー、茶堂竹崎律次郎、竹崎との交渉をめぐつては他の機会に発表する予定）。

“もしその生徒の中に課業を充分に勉強し毎日善き結果を現わすものあれば、自ら深くこれを喜び頭を撫してこれを賞す。……先生はまた実に精勤勉強倦むことなきの人にして、その洋学校に在る5年の間、僅かに2回の欠席をなしたるのみ”（下村孝太郎談、同誌134頁）。

生徒の数が増加するに従つてJanes 1人での授業は困難になつたので、上級生の優秀なものがこれを助けた。このような経過の中でJanes は毎週木曜夜に自宅で聖書の講義をするようになった。元来、洋学校は設立に際して横井小楠の“堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽す”をモットーとしていたので、Janes も講義では決してキリスト教を説かなかつた。

“殊に今より追想して猶かつ余をして感嘆せしむるものは、先生が教場等においてかつて一言も口に基督教を説かずして、ただ己の行を以て自然に感化せしめんと務めたることなりき。換言すれば無言の説教をもつて余輩を導きたり。もしそれ先生にして普通の宣教師の如くただ口にのみ神の存在を説きキリストの教を説かば、余輩あに盤根錯節と幾多の迫害を破り進みて基督の門に入ることを能くせんや”（同誌133頁）。

これは多年牧師として伝道生活をつづけた不破唯次郎の述懐である。Janesの態度がこのようであつたから、生徒の中で聖書に親しむ者はようやく多く、かつ熱心を加えた。当時、熊本的情勢は実学党は頽勢であり、加うるに数年後には神風連の乱がまつていた。洋学校の唯一の支持勢力である実学党も“堯舜孔子の道”にこだわつてキリスト教信仰を容れることはできなかった。上記不破唯次郎のいわゆる盤根錯節と幾多の迫害がこれらの生徒を見舞つたのも、このような風土においてはむしろ当然であつたかもしれない（活々とした実例を徳富健次郎『竹崎順子』1923にみることができる）。

周知のようにこれらの迫害に対する反動として、明治9年1月30日夜、市内花岡山に洋学校生徒有志30余名が集合し、迫害に屈せず奉教の誓いをたてた。世に有名な“花岡山の誓い・熊本バンド”がこれである。やがてこのバンドに加わつた者のうちから京都同志社に走る者がつづき、同志社建学の中核となつていく。こうしてJanesは札幌のW. Clark、横浜のS. R. Brownとともに近代日本基督教史上に不朽の名

* 明治期の九州文学は熊本洋学校の後身、熊本英学校の機関誌。13号は洋学校廃校ののち、15年記念特集号である。頁数は昭和44年熊本年鑑の復刻版による。以下同じ。

をとどめることになる。

しかしこの事件は洋学校の内部でも生徒間の対立を鋭くした。実学党が失脚した県庁はこの学校をさらに維持する熱意はなかった。明治9年10月はJanesの第5年目の契約がきれる月であったし、それは洋学校の廃校を意味していた。これより前8月には2回目の卒業生を出し、さらに3回生に対してもくり上げ卒業式を行なった。10月7日Janesは熊本を去った。その7月にClarkは札幌農学校に招かれていた。そして10月24日には神風連が挙兵した。

“その後大阪英語学校に1カ年をすごして帰米、数年後さらに京都の三高に來任、3カ年にして帰米、明治42年3月27日加州サンノゼにて没した。年73才”（前掲熊本県史802頁）。昭和41年8月、西南大学原田三喜雄助教授は渡米の1日を彼の墓を訪ねたがSan Francisco郊外の共同墓地にあつたという。

3. 『生産初歩』についての若干の考証

著者の自序によればこれは“熊本学校演習ノ一課ニ施シ初年生徒ニ命シ訳述セシメ”たものである。訳した前記の山崎為徳、松村元児、市原武正の3名は初年生徒といわれているが、実は1回生の意味であろう。

山崎は陸中水沢の人、当時の水沢県令安場保和の奨めにより、3人の秀才が東京に遊学した。後の海軍大將齋藤実、後の東京市長後藤新平と山崎であつた。熊本に來たときは15才、熊本に赴任する師Janesと同船という浅からぬ因縁であつた。成績も優れ、信仰にも最も早く入った。

明治8年第1回卒業生、東京開成学校入学。翌々年には東京大学となつていた同校を退学して同志社に入学。12年同志社を卒業してその経営と伝道にあたる。14年25才にして夭折す。

松村元児も第1回生で明治5年の記録によれば最優秀の3名に属し、同学生の指導をなすことが認められている。しかし7年9月の4年生の名簿からは名が消えている。その理由はもとより、その後の消息も不詳である。出身地も不明。

市原武正は大次郎ともいい、第1回生で明治5年には松村とともにトップの3人に属する。しかし4年生進學時は14名中山崎トップ、市原は4～5位である。これも遺憾ながらその後の消息は分っていない。クリスチャンにはなっていないようである。出身地も不明である。要するに訳者の3人はいずれも1回生で成績

最も優れた生徒であつたことは確かである。

次に『生産初歩』の発行年次*であるが、奥附にも明示されていない。白川県洋学校蔵版とあるが、県域は別として県名からのみ考えれば、熊本県は明治5年6月より白川県となり、9年2月にまた熊本県となつた。したがつて5年6月から9年2月まで白川県洋学校と称されたと解せられる。次に上述の訳者の1人松村元児は明治7年9月には洋学校名簿にはない。そうだとすれば本書の発行は明治5年6月から7年9月までの2年3カ月の間と推定できるであろう。

出版元は前記のように東京芝大明神前の岡田屋嘉七であり、江戸の時代からの老舗である。ただ定価がつけられていない。さらに書店名としては岡田屋とは別枠に、熊本書林として豊前屋太平、同珠数屋貞吉、同小島屋義八郎および宇土書林江戸屋又十の4名が列記されている。販売店とみるべきであろうか。

なお、Janesには別に著書は知られていない。ただ明治7年秋、学校の官費廃止が旧藩主等の援助で救われたことを祝賀しての講演原稿の翻訳が残っているだけである。帰国後は農業の余暇に執筆にいそしみ原稿もかなりの量に達していた。のち洋学校・同志社の卒業生浮田和民が早稲田大学に寄贈したといわれるが、同図書館浮田文庫にも収められていないし、受け付けられた形跡もなかった。

4. 『生産初歩』の概要

『生産初歩』著述の動機については、彼の自序において明らかである。曰く、“余此書ヲ著スハ肥後人民耕作ノ進歩ニ良全ノ教導ヲ示シ、傍ウ國人許多ノ疑問ニ答フルニアリ。今國人一般希望スル処耕作ノ進歩ト學問ニ在リ。斯クノ如クナルトキハ進歩接続疑フベカラズ。凡ソ耕作ハ労働ノ精力ニテ成ル物ナレバ輕卒ニシテ之ヲ始メ許多ノ空耗ヲ生シ勢力ヲ失フトキハ、終ニ新知ヲ抵抗スルニ至ルベシ。斯ル弊害ヲ防キ教導スルコト素ヨリ余カ願ナリ。余思フ。此弊害ヲ生ゼザルハ農民其職業、要旨ヲ熟考スルニ如クハナシ。耕植収納農具産物市場等ハ學問或ハ教育ノ力ヲ要スル者ナリ。農民自ラ起ラザルカ又ハ愚昧ナルトキハ何程細密ニ教導理解スルトモ一ノ成功ヲ見ルベカラズ。若シ農民自ラ旧習ヲ捨テ耕種ノ買入ヨリ其ノ産物ヲ鬻ク等ニ至ルマテ其方法路程ヲ學ビ得ント深慮熟思スルニ至ラバ進歩ノ事業ヲ無窮ニ伝シ事敢テ疑フベカラズ”

訳がせいぜい3年生か4年生の生徒によつてなされ

* 海老名弾正（2回生）はJanesの農業に熱心であったことを述べたのち“また曾て『養蚕初歩』なるものを著せり”と述べている（前掲書137頁）。

ており、また統一された訳語もなかつた関係上、文章は生硬であるがその意味するところは容易に理解できるであろう。ここで Janes のために強調しておきたいことは、彼が農業においても農民の学問への意欲が決定的に重要だと述べている点である。農業においても学問が必要であり、それがなければ無駄な労力を消耗し、その結果、新しい知識を拒否するようになる。そうでないためには農民が自らの職業の認識を深め、生産・販売の過程について学ぼうとする意欲が大切であると述べているのである。このいわば教育観が彼の5年間の洋学校生活を貫いた根本精神であり、その子弟に多大の感銘を植えつけた根源である。

ところで『生産初步』の内容は、総論、茶説^{コヤシ}、糞説、米説の4項より成っている形式であるが、実質は総論、蚕説、茶説^{コヤシ}、糞説、米説、結論の6項に分つべきである。すなわち総論が自ら蚕糸を説くように移行し、米説が最後には結論となるように構成されている。そこで以下この6項に従つて原文を抄記しつつ内容を紹介することにする。

総 論

“夫国ノ耕作ヲ進ムルノ第一歩ハ其地固有ノ産物ヲ増殖スルヲ要ス。最モ高価ノ品物ヲ撰ム可シ”

固有の作物はすでに適作物であることは明らかであり販売方法も或る程度できている。準備もなくて新作物に手をつけるのはよろしくない。それでは、

“今肥後産物中如何ナル物盛大ニ生ジ、之ガ為メニ当地或ハ長崎ニ市場開ケ貿易盛ナルノ良品アル乎”
 れが農民の作物を選ぶ第一歩であつて、もしその良品があるならば、いかなる方法を以て労費少なく能く産するかを考えねばならぬ。これが第二歩である。

“肥後ニ於テ高価ノ産物三種アリ。即チ米絹茶ナリ。此ノ三種ノ如キ高価ノ品、他国ニ産スル稀ナリ。此ノ産物ノ市場、国ノ中央ニ開ケタリ。絹茶ハ永続ノ質ニシテ奢侈ニ用ユル品故、富人高価ヲ厭ハズシテ之ヲ求メン。農民此ノ二種ヲ耕サバ恰モ品物ヲ蓄積スル如ク終始変ルコトナク老年ニ至ル迄益ヲ得可シ。殊ニ貴ブベキハ地ノ沃饒ヲ減スル甚タ少キヲ以テ農民ニ肝要ナリト云”

肥後には米絹茶のような高価な固有の産物がある。とくに絹茶は永年作物であり、しかも地力を余り消耗しない利点がある。そこでこれらの各論に移っていく。

(蚕 説)*

“肥後ノ氣候地味何レモ Italy 及ヒ France ノ土地ニ等シク、殊ニ農民養蚕ノ法ヲ学ビ且蚕種ヲ得ント欲セバ外国ニ往クヲ要セズ。又人民皆勉強事物ニ注意スルノ性質ナル故、必ズ此ノ職ニ適クベシ。就中此ノ地ノ大ナル益ハ日雇人多クシテ其賃銀下直ナルニ在リ。養蚕ハ一度ニ多クノ人手ヲ須ツ。此レ則チ方今米国ニテ此ノ職盛ラザル所以ナリ。彼地ハ桑蚕能ク成長スト雖、只日雇人少ク且其賃銀高クシテ殆ト此ノ職廃止スルニ至ラントス。此ノ地ハ否ズ。日雇賃ノ下直ナル、米国ニ比スレバ十分ノ一ニ当ラン。而シテ（肥後において）稍養蚕ニ熟シタル女ハ此ノ業ヲ好ム、且又一大益ハ絹量日少ナシト雖モ其ノ価大ナリ。故ニ市場ニ運輸スルノ賃銀モ亦廉カナル可シ。肥後農民絹ヲ以テ益ヲ得ルノ大ナル、殆ト Italy 及ヒ France ノ農民其ノ益ヲ得ルニ均シカラン。若シ上品ヲ生セバ益彼ヨリ多シテ入費ハ少ナカラン”

Janes はこのように蚕（養蚕・製糸）の利を説くのであるが、以上の簡単な論説の中に多くの重要な問題を示唆している。すなわち、第1に養蚕は固有の産物であり、その増産のために、蚕種や技術を外国に学ぶ必要がないばかりでなく、国人は皆注意深く養蚕に馴れているし、女子はとくにそうである。第2は養蚕は労働集約でとくに一時に多数の労力を必要とする。そのばあい、労賃の低いのが何よりの強味なのである。第3は製品の重量に比して高価であること、したがって運送費も相対的に低い。第4にこの理は上製品であればあるほど貫徹する。したがって肥後が益々上製品を産出するならば、伊仏両国に対して決しておくれをとるものではない。

Janes はさらに日本の絹糸の最大の競争者である中国が、当時政情不安であることを指摘し、政治上の変革、災害、戦争の起る可能性が強く、そのことは彼国にとつては不幸であるが、日本蚕糸のためには発展の契機になるだろうとしている。また、彼の絹というのは（絹と訳されているのは）生糸のことであるらしく、これを紡績加工せよという。この場合の紡績も正しくは織布と解すべきであろう。

そこで次に“絹ノ産ヲ増殖スルノ方左ニ示ス”と述べてかなり技術的側面にもふれる。

第1条 政府人民ヲシテ益養蚕ヲ進歩セシムルニ意ヲ注ク可シ 最其ノ法ヲ学ブヲ要ス 而テ精細其法ヲ講求上梓シテ以テ国人一般ノ用ニ供シ、又是ノ

* () は筆者挿入、[] は原注、以下同じ。

法ヲ學ビ得タル人ハ之ヲ秘セズシテ宜シク他人ニ教ヘ伝フベシ

第2条 今肥後ニ桑樹能ク充備セリ 先ツ2, 3年間ハ歴条ト打挿ノ法ヲ以テ樹ヲ増スニ注意シ, 樹ヲ得ント欲スル者ハ他國ニ往カズ直ニ此地ニテ其ノ願ニ當ツ可シ, 蚕種モ又同様ナリ, 初メ1, 2年桑樹蚕種ヲ増殖スル事, 絹ヲ産スルヨリ遙ニ肝要ナリ.

第3条 桑或ハ茶ヲ植ルニ成ル可ク費ヲ省ク可シ 植ヘタル後ハ能ク注意ス可シ 植ルニハ空地ヲ拓キ用ユ可シ.

第3条ノ3件ハ皆必要ナリ, 如何トナレバ第1件ニハ智アル農民新植物ノ耕種ヲ稍知り必ズ益アルヲ証セザレバ1人トシテ新作物ニ大金ヲ費ス者アラン乎 第2件ニハ桑樹ヲ植ユルト雖モ半途ニテ其注意ヲ怠ルハ却テ植ヘザルヨリ又種々ノ樹木モ繁茂セ^(マ)リ, スノ如キ草木繁茂スル(空)地ニ(現在)独り桑樹ノミ能ク成長セザルノ理果シテ如何ソ乎 余其ノ理ヲ解セザルナリ, 此等ハ米説ノ中ニ分明ニ説クベシ, 余考ルニ第3ノ(空地開拓ノ土地ノ)地位ト東南ニ對スル山腹ノ地位ハ最も養蚕ノ場所ニ相応セント. 少シノ費用ヲ以テ試験セハ吾ノ説ノ実否ヲ見ル可シ. 若シ吾カ説実ニシテ右ノ地養蚕ニ相応セバ, 今肥後ノ耕作物ニ少シモ妨ケヲ為サズシテ養蚕能ク進歩スベシ, 然レドモ此ノ草地ヲ開拓シ耕植ノ地ト為サンニハ從來ノ農具ヲ捨テ新器ヲ要ス, 曠原ニハ鋤ヲ用ヒ狭地ニハ踏鋤〔鋤路鋤洋具ナリ〕ヲ用ユ可シ, 草地ハ地ノ背腹ノ部ナル故從來ノ如ク捨テズシテ宜シク之ヲ鋤キ返シ, 自然ニ腐敗セシムベシ, 然ラバ積年桑樹ノ為メ最上ノ糞トナラン, 夏又ハ早秋ニ此ノ草地ヲ鋤キ返シ〔早キ方宜シ〕明春マテ其儘腐敗セシメ早春ニ至リ蜀黍野菜或ハ生長ノ間奇麗ナル地ニ生スルヲ望ムノ植物ヲ植ユ可シ, 然ル時ハ其秋桑樹ヲ植ルニ至リ地味最も桑ニ応シ且ツ肥饒ナル可シ, 若シ草ヲ鋤キ返シタルノ冬, 石灰ヲ此ニ散ラサバ速ニ草ヲ腐敗セシメ而テ數年ノ間桑樹ニ大ニ利アラン.

この第3条はさらににつづけて栽桑用の空地としては, 旧士族の居屋敷の存在を指摘している. 熊本にかぎらず各地で明治10年前後から養蚕が奨励されるが, そのばあい, まず着手されたのは旧士族屋敷内の栽桑であつたことを思えば, Jonesの指摘は正しかつたといえるであろう. なお(蚕説)は4条で終るが, 第4条は養蚕を創業するにあつては, 桑苗蚕種をよく選ばなければならないとし, 桑は平地には刈桑, 路傍には魯桑が相応するといひ, 蚕種では France で中国の白

蚕を入れて成功した例, および蚕病防除研究の必要などを説いている.

ところでこの養蚕増殖論において注目すべきは, 第1条において技術の公開を説いていることである. このことは封建農学はもとより河野剛の『農家備要』, 津田仙の『農業三事』にしても, 自己の学識や発明を私的所有としてPRする傾向があり, また農民の間には周知のようにその技術を秘匿する傾向があつた情勢において, 本書が啓蒙・報導を目的とするとはいいいながらも全く新しい提言といわねばならない. いいかえれば外国人でなければ気のつかないことであつたろう.

第3条には実際的な注意をいろいろ与えているが, 改めて説明する要はあるまい. 第2件で草地と記しているのは, おそらく畑地で休耕中のものであろう. 熊本の場合, 草原は背腹の地とはいえないであらうから, また開墾に際して洋具を用うべきことを述べているが, 前述のように竹崎茶堂等に対して実際にこれらの購入をあつせんし, 自ら使用法を伝授したりしているのである.

茶 説

“余既ニ絹ヲ説ケリ. 茶説モ亦之ニ同ジ. 故ニ重ネテ此ニ委シク説カズト雖モ, 茶ニモ注意ヲ加フ可キ条々ヲ枚举ス.

- 第1 当國ノ氣候地味実ニ茶ノ生長ニ相応ス
- 第2 人民既ニ茶ヲ耕種スルノ法ヲ粗熟知ス
- 第3 製茶売買ノ道既ニ開ケタリ
- 第4 茶ハ量目少シト雖モ其ノ価貴クシテ運輸甚ダ輕便ナリ
- 第5 茶ハ絹ト等シク外國ニ産スル甚ダ稀少ナリ
- 第6 産茶盛大ノ國ハ只日本ト支那ノミナリ
- 第7 茶ヲ製スル人ノ利ヲ得ル, 之ヲ産スル人ノ利ニ同ジ
- 第8 上茶ハ多ク産スルコトヲ難シトス
- 第9 絹ニ就テ説ク4箇条ノ内, 蚕病ノ1件ヲ除クノ外都テ茶ニモ同ジク適ス”

以上については格別付言する要はないと思われるが, 流通機構がいちおう成立していること, 重量に比し高価であること, 貿易を念頭においていることは重ねて注意すべきである. 茶説はさらににつづけていう.

“右ノ外必記載ス可キ2, 3事アリ, 之ヲ此ニ加ヘン.

茶ノ品質ヲ第1ノ注意トス可シ, 廉価純粹ナラサル茶甚タ多クシテ之ヲ用ルニ余リアリ. 然レトモ上品純粹ノ茶普殖スルトキハ常ニ高価ニシテ其売買速カナ

ル可シ。カクノ如キ上茶ハ多ク産スル事難シ。”と述べて農茶問題を取り上げて強くこれを警しめている。次は加工・再製茶問題であつて、“從來此地ニテ製スル茶ヲ多クハ他國ニ送りテ再製シテ以テ外國貿易ニ備フ。故ニ肥後産茶家、価ヲ得ルノ多少ハ再製家ノ与フル所ニ任セサルヲ得ズ。是ヲ以テ再製家價茶ヲ製シ貿易ヲ妨ケ禍ヲ産茶家ニ及ボセリ。……若シ能ク自製シ此茶外國ニ聞ユル時ハ其価年毎ニ増シ純粹ナラザル茶ハ悉ク不用トナラン。斯ク為ス事ハ皆肥後人民ノ正直ノ力ニアリ。然レドモ人民自ラ此ノ法ヲ起シ此カ為メ自己ノミナラズ子孫マデ永ク利益ヲ得ル事ヲ知ラザルベカラズ……”といつて悪茶防止の重要性を説いている。第3は宣伝問題である。“次ニ純粹ノ茶ヲ外國ニ普ク知ラス可シ。此方法ハ今米國ニ滞在ノ朋友アラバ書ヲ遣リ委シク茶ノ品質ヲ説キ其見本ヲ送り、彼國ノ商人等ニ見セ肥後ノ産茶ナルコトヲ知ラシムルヲ要ス可シ、然ラバ此事直チニ米國新聞ニ記載セラレ茶ノ貿易ヲ開クノ一助トモナラン。産茶家成ル可ク高価初芽ノ上茶ヲ製シ広く海外ニ賣クヲ目的トス可シ。而テ肥後ヨリ直チニ外國エ茶ヲ輸出スル時ハ箱毎ニ肥後産ノ号、製茶家ノ姓名及ビ政府ノ印ヲ記載セバシ。此ノ如ク為スニハ先ヅ茶ヲ包ミ船ニ積ミ込ムノ方法ヲ悉ク學ブベシ。茶ノ質良品ナレバ又之ヲ多ク産スル事ヲ注意ス可シ。前ニ記載スル如ク産出多カラザレバ商人來ルナシ。是ヲ以テ茶5万箱ヲ売ルハ50箱ヲ売ルヨリ易キノ理アリ。……”このように宣伝、包装、大量取引の途などを説くこときわめて懇篤である。最後にこのような取引のためには予め貯蔵することも必要であるとつけ加えている。

糞 説

糞はこやし、肥料の謂である。これまでの2項は販売・経営に重点がおかれていたが、この項はこやし＝地力問題をめぐつて技術について論ぜられる。しかし全体としては最も頁数が少ないのでまず全文をかかげよう。

“糞ノ絹及ビ茶ニ於ルヤ又必用ノ物ナリ。前ニモ言フ如ク絹及ヒ茶ハ他國ニ賣クト雖モ地ノ膏腴ヲ取り去ル少シ。此レ思フ外緊要ナレ。夫レ植物ハ土ト糞ヨリ養ヲ得ル。故ニ糞ハ其食ナリ。或ル植物ハ多クノ糞及ヒ膏腴ノ地ヲ望ム事他ニ勝ル者アリ。糞ト地ハ両ナガラ農民ノ貴ブ者ニシテ糞無ケレバ土地瘠ス。土地瘠スル時ハ農夫モ亦随テ貧シクナラン事勿論ナリ。若シ農民植物ニ糞ヲ用ニ為、時日労費ヲ費サバ利益ヲ定算スル時、此ノ費ヲ此(利益)ヨリ減ゼザルベカラズ。産物ハ地ト糞トノ形ヲ変シタル物ナリ。或植物ハ糞及ヒ

地ノ膏腴ヲ取ル事他ヨリ多シ。之ヲ取り去ル事多ケレバ其ノ益モ亦大ナラザル能ワザルノ理ナリ。否ラザレバ農民貧苦ヲ受ン。1植物ヲ以テ1年間ニ之ヲ試ル難ケレトモ2種ノ植物ヲ以テ兩3年間ニ之ニ注意セバ糞ヲ費スノ多少詳ニ辨スルヲ得ン。

肥後ニ1種ノ植物アリ、農民ニ其質ヲ告ン而テ前ニ言フコトモ亦分明ナルヘシ。乃チ煙草ナリ。米國ニテハ煙草ヲ植物中ノ貪植物トス。何ントナレバ地ノ膏腴及ヒ糞ヲ吸ヒ取り地ヲ荒ス事最モ甚シケレバナリ。其ノ茎小樹ノ如クシテ広く大ナル葉ヲ生ゼン為メ、年毎ニ糞ヲ増サザルベカラズ。若シ増サズンバ則チ其ノ生長衰フ可シ。其ノ茎ハ無用ニ屬シテ只之ヲ焼クノミ。焼ケバ其ノ灰少シノ糞トナリテ元ノ地ニ復ラン。然レドモ多分ハ長崎ニ送り外國ニ輸出ス。此ノ枯葉形異ナレドモ皆糞ノミナリ。是ヲ以テ煙草1斤ヲ生ゼバ其地1斤丈瘠スル故、又糞ヲ其ノ地ニ入レズンバ煙草再ビ能ク生ゼズ。

今、絹茶煙草ノ3種ヲ以テ糞ヲ費スノ多少ヲ左ニ比較セン。

桑樹ノ産他國ニ売り出ス物ハ絹ナリ。其ノ外樹ノ茎死蚕ノ如キ物ハ樹根ニ集メ置カハ明年生葉ノ糞トナル可シ。茶ノ産他國ニ売出ス物ハ葉ノミナリ。農夫煙草1斤ノ代ニ5錢内外ヲ得、茶1斤ニ50錢ヨリ100錢ヲ得、絹1斤ニ付テハ其価5円ヨリ6円ニ及バン。譬ヘバ糞1斤ノ価ヲ半錢トシ、右ノ3種ヲ産スルニ糞ノ価ノミヲ本トセバ煙草1斤ニハ10倍ノ利アリ、茶ニハ100倍余ノ利ニシテ、絹ニハ1000倍余ノ利アリ。是ヲ以テ考ヘバ外ニ解明スモ亦贅言ナラン。”

Janesの肥料論は以上を以て終る。これで明らかのように、彼は植物は土と肥料の養分が変形したものであると考えており、したがって生産したものに相当するものは地に返さなければならないという、いわば農業重学的立場に立っている。それは1870年ごろの日本および米國農業の实情からして、自給肥料本位に考える当然の結果であろう。その場合の樞玉にあがつている煙草は、これも当時の熊本県ではまゆ、茶、米につぐ有力な輸移出農産物であつたので、彼のような議論のもともたまた当然であつたと思われる。反面、肥料製造のための労働時間を費用に含め、利益から控除すべしという正当な主張をなしている。しかし肥料製造の方法や施肥技術等々については遺憾ながら言及していない。

米 説

“米説ヲ能ク了解センニハ先ヅ往古ヨリノ事歴ヲ考フルニ如クハ無シ”と述べて、米が長い間政府の年貢

の対象となっていたため、水田偏重となっていたことを指摘する。“故ニ天然田地ナラザルモ水ヲ導クニ盡力シ導キ得ル地ハ米ノミヲ耕シテ他ノ植物ヲ植ルナシ。斯ク莫太ニ米ヲ耕ス雖モ（年貢高きが故に）未タ曾テ人民ノ間ニ足ル事ナシ。農民自ラ労働キ産シタルヲ食フ事甚タ稀ニシテ、過半ハ他ノ穀類ヲ耕シ馬及ビ家畜ト食物ヲ同フスルガ如シ。斯ク一植物ニ依頼スルハ危クシテ悪シ”

米説にいたって Janes はやや農政論に重点をおくようになる。主食を1作物に集中していたため凶作がつついて多くの餓死者を出した例を印度や Ireland 等にとつて警告する。さらに1作物に集中して他作物を抑えるときは、そのため流通・貿易の途も塞がれるという。しかも現在、肥後においては米価が下つているのは何故かと問う。

“諸役人農夫屢余ニ問フ。米ノ代リニ如何ナル食物ヲ植ヘテ然ル可キ乎ト。余思ヘラク其ノ思ハ米ノ多キ故ニ非ズ、米ハ肥後産食物中ノ最モ宜シキ一ニシテ殊ニ世界中肥後米ニ勝ルナシ。若シ人民皆米ヲ以テ常食トセバ其価常ニ高クシテ農民大利ヲ得ン。”然るに現況は米を常食とするのは一部富貴の人にかぎられているのであつて、一般人民は家畜同様の食事をしていゝる。農民が蚕茶に力を注ぎ利益を得ることは、米が主食になり米価もまた上るであろうと補足する。さらに主食が偏ることは“奇ナル腹レ病及ビ脊骨病”の原因となることを実例をひき、人間労働の多少強弱が食物の善悪にかかわっていること、したがって国運も人民食物によつて長期的には定つていくことに注意している。

そして肥後の現況では雑穀が多いが、これを小麦および阿蘇（玉）蜀黍にかえて増殖すべしと述べ、粉食パンの利を説く。阿蘇（玉）蜀黍も小麦と同じように扱われているが、Janes の場合に畜産論が全く欠除しているのは特異である。

“幸ナル哉肥後、精白ノ米アリ 莫太ノ麦アリ 而テ黄金ノ蜀黍アリ、麦（玉）蜀黍ヲ以テ欧州米国ノ如ク当時ニテモ食物ト為ス時ハ飢饉ノ恐レナク、只之ヲ笑ト為シ、而テ黄金ヨリ貴キ絹茶及ヒ他ノ物品ヲ産出スルヲ得ン。”そしてさらに礦業、製造業を發展させ貿易を振興させるべきだというのである。そのことが（結論）に移つていくのであつて、そのような興農殖産の根本になるのは人民の教育であることを強調する。“斯ク（国勢の）盛大ノ時日ヲ見能フト否ラザルトハ皆今日少年ノ実行ト其ノ性質ニ依ルコト論ヲ俟ズ

シテ明ナリ、今ノ少年ノ如ク任重クシテ為スヘキノ時ニ逢フ者外国ニ稀ナラン。所謂ル少年ハ富貴貧者ノ差別ナク子弟タル者ヲ云フ。”こうして独特の少年教育論が展開されるのであるが、直接に農業とは関係がなくなるから、この点については他の機会に明らかにしたい。

5. 余 論

Janes の指導をうけた者には、洋学校の生徒の外に、洋学校の支持者であり、後には反キリスト教の立場から対立せざるを得なかつた実学党の人々がある。中でもその首領格であつた竹崎茶堂は最も熱心に西洋農学の導入と実践に努めた。その甥である徳富健次郎は、“開拓使が北海道で大きくやつたことを、茶堂は熊本で小さくやつた”と述べているのは、文学者として巧みな表現である。西洋器械や新作物の多くは、ここでもわが国一般と同じように、結果的に消滅せざるを得なかつたが、Janes が『生産初步』でしめした養蚕、製糸は明治10年代からようやく熊本でできんになった。米はもちろんである。また、その教え子からは横井時敬や岡田章生のごとく駒場農学校に進むものもあらわれた。この横井時敬と Janes との交渉の問題については稿を改めて論ずるつもりである。

（付記） 本稿は昭和45年10月、九州農業経済学会における口頭報告を加筆、補訂したものである。文献的に多くの御教示を頂いた東京農業大学須々田黎吉助教授に厚く御礼申し上げる。なお本稿において他日の発表の機会としたものの一部は、東京農業大学農業経済学科機関誌『農村研究』同校創立80周年記念号に掲載される予定である。

参 考 文 献

- 同志社大学人文科学研究所 1965 熊本バンド研究。みすず書房（東京）。
- 福田令寿 1971 百年史の証言。日本 YMCA 出版部（東京）。
- 熊本英学校 1893 九州文学。第31号（1969 熊本年鑑に復刻収載）。
- 熊本県 1963 熊本県史近代第一。熊本県（熊本）。
- 松井康秀 1965 熊本洋学校とその周辺。浩文社（北九州市）。
- 日本農業発達史調査会 1955 日本農業発達史。第1—3巻 中央公論社（東京）。
- 小野武夫 1941 農村史。東京経済新報社（東京）。
- 斉藤之男 1968 日本農学史。農林省農業総合研究所（東京）。
- 徳富健次郎 1923 竹崎順子。福永書店（東京）。
- 全国農業学校長協会 1941 日本農業教育史。農業図書刊行会（東京）。

Summary

L. L. Janes (1837-1909) is well known in Japanese Christian history as the father of Kumamoto Band together with W. Clark of Sapporo and S. Brown of Yokohama. He was an earnest teacher of English at the Kumamoto Senior High School from Meiji 4 (1872) to Meiji 9 (1877). The book of *Seisan Shoho* is a Japanese translation of the lecture on farming of Kumamoto Prefecture that Janes gave in English in his extra-curricular seminar at the School. This book was published at Tokyo around 1875, but for a wonder we have not been able to find it among the bibliography related to Japanese agriculture in the Meiji era. By courtesy of Dr. Akio Honda I had a chance to have a copy of the book a few years ago. After some biographical studies about Janes, I thought that the valuable contents of the book had to be introduced.

Seisan Shoho includes comments and recommendations for improvement of agricultural production in Kumamoto Prefecture early in the Meiji era. The various literatures on Japanese agriculture having contact with the European agricultural science early in the Meiji era can be categorized into the following three:

- 1) Translations of European agricultural books into Japanese,
- 2) Publications by Japanese who had studied in European countries, and
- 3) The comments and recommendations by European or American learned to Japanese agriculture.

Seisan Shoho belongs obviously to the third category. Other well known books in this category are the works by Max Fesca, Oskar Kellner and so on, but those works were published since the middle of the Meiji era. Janes' *Seisan Shoho* was published early in the Meiji era and distinguished owing to the comments and recommendations for improvement of agricultural production of a particular area (Kumamoto Prefecture).

The book of *Seisan Shoho* consists of some chapters —the improvement of silk production, tea production, manure application, and rice production, and conclusion. The important recommendations by Janes for improvement of agricultural production of Kumamoto Prefecture include:

- 1) Specialization of farming with the native products of high value,
- 2) Perspective of profitability of silk, tea and rice among the native products in Kumamoto Prefecture at that time,
- 3) Increase in silk and tea production by reclamation of new arable land except paddy land, and
- 4) The adaptation of European implements such as plough and hallow to the farming on the newly reclaimed areas.

Since the middle of the Meiji era, silk and tea industry in Kumamoto Prefecture progressed remarkably as Janes pointed out early in his book.